

(6) ボーリング調査

陥没箇所の地質構成の確認と、対策工検討の基礎資料とする目的でボーリング調査を実施した。調査平面図を図2-11に、調査掘削法面観察結果とボーリング結果を併せて作成した地質断面図を図2-12、図2-13に示す。なお、基盤地質の地層区分は参考文献⁴⁾：5万分の1地質図幅『岩見沢』(札幌一第14号)：昭和39年北海道開発庁に従った。

ボーリング調査の結果、基盤岩として新第三紀川端層の良好な砂質泥岩が確認され、陥没が基盤地質に起因するものではないことがわかった。

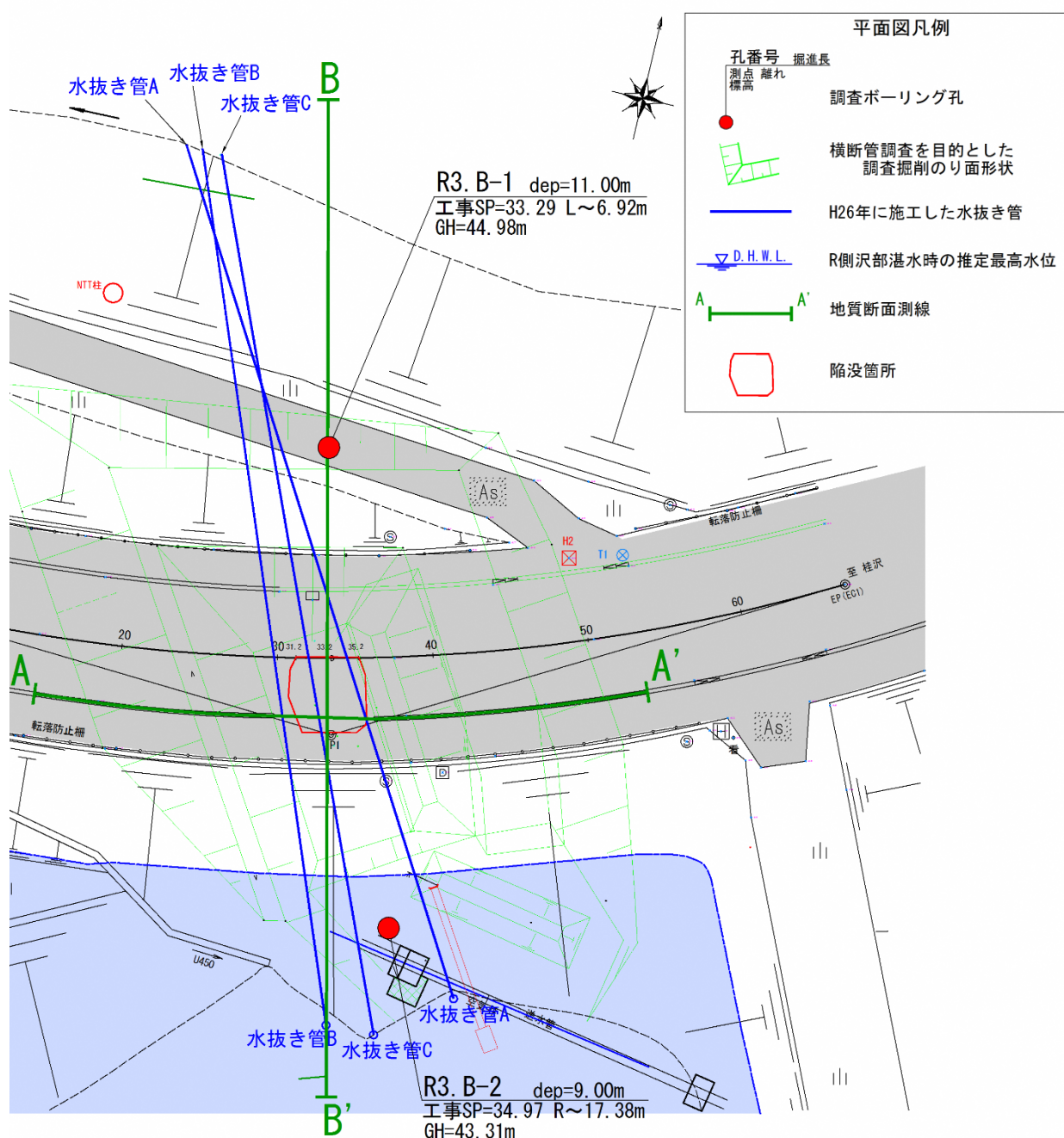


図2-11 調査平面図

調査地に分布する地質の層序と特徴

時代区分	地層区分	記号	風化及び土質・岩質	地層の特徴	N値 (平均N値)	
第四紀	道道期	陥没土塊	Cdt 粘性土 砂混じり礫質土 礫混じり砂質土	R3年11月11日の道路陥没の調査掘削で明らかになった土塊で、旧道期・市道期・現道期の3期の盛土層は不均質に混合している。	—	
		道道盛土	bk3	S59年改良工事による道道盛土。	砂岩礫と砂質土からなる砂質土層。礫質土層と砂層が水平に互層し、含水低い。	5~18 (13)
	旧市道期	旧市道盛土	bk2	礫混じり砂質土	三笠市の市道として認定されたS36年頃の道道盛土。L側の一部に石積擁壁が見つかった。	—
			bk2	礫混じりシルト 礫混じり粘土	シルト岩の角礫と、比較的硬い含水の低い粘性土基質から成る。昭和50年代の空き缶等稀に混じる。	3/33~10 (6)
		bk2	礫質土	市道構築の際の道道盛土の最下層で、シルト岩の角礫と粘性土基質からなる礫質土。含水やや高く、ゆるい。	—	
	旧道期	旧道盛土	bk1	礫混じり砂質土 ~砂礫	詳細不明だが恐らく北炭開始頃からあった道道盛土。	—
			bk1	礫混じり シルト~粘土	旧道構築の際の道道盛土の一部で、泥岩礫を混入し、粘性土を主体とする。レンガ・シャモット・生木片混じる。	—
	—	沢床堆積物	ac	シルト	含水高く、ほぼシルトから成る比較的均一な土相。	6
			as	礫混じり シルト質砂	植物片を混在する礫混じりシルト質砂層。φ5~10mm程度の礫を5%程度混入する。基質は含水の高いシルト質細砂から成る。	5~14 (8)
			Km-w	風化砂質泥岩	シルト岩~砂岩から成る本調査地の基盤岩。風化部は、無水掘削により土砂で採取される程度に脆弱である。	12
新第三紀	中新世	川端層	Km	砂質泥岩	未風化部は短棒~棒状コアで採取され、割れ目の変色や脆弱化等はほとんど無い。	50/8~50/11 (154)

※) シャモット=石炭選別後のズリが蒸し焼きとなったもの。

断面図凡例

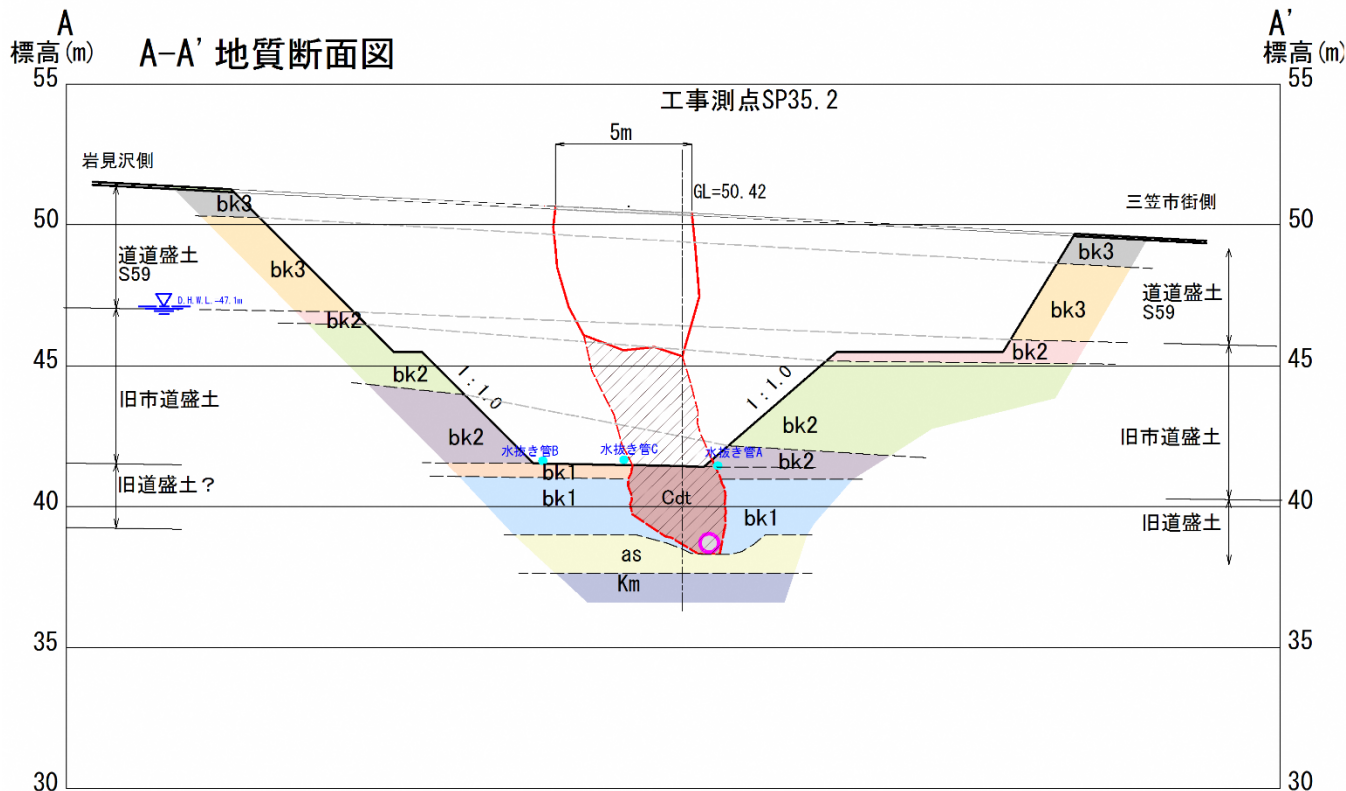
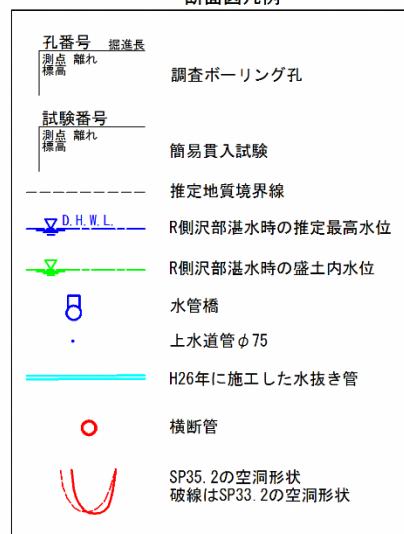


図2-12 A-A'地質断面図